東心巡嶋記 第三 巻四

1278
24

芝青堂

内閣文庫

後輯第四十六

鎌倉の糟漬鮑

高野の年魚鮓

とくと聽き賞を褒げく。桜枝を先に立て庖厨のくまぐまを起記る。

藁二郎が氣早行なる守直ホも制めくれ。竈門の支を任用せに精悍く

勢しくその資少くして且見姫いこれらのすを桜枝は笑ひ且憑しく思ひ

つよ見さえひその保養よ為んと憂苦を忘てとふ〳〵ねじ心熟ふ清さう

とく次の日桜枝よ結髪さして藁二郎よ對面ふその人表を人の多世下の品合

児れども浮くるものハ一点ハ現これが故主よ忠信なる親の為よ怒を候せ。

その代顛末を守直が物ていよ待人ぜ人よ捧ふ

れびを吉見殿のもくとあくハ寄さ。彼よ信あるハ此や赤信なり

夫方人を始るる為と心よ誓て鎌倉の風聞をもくせく聊慰ひかくて

両三日を経る程に有一日藁二郎は守直に向ひて海道なる鎌倉の風聞も尓後のことを尋ねに街談説話を聞めぐり来て四五日が程身の暇と賜へとの守直笑くれば赤その方なれども姫と人あまり恋ひ分とるに隨て旅も始めて心安くなれば和主彼処へ遣くやくれもやしく便宜をひつぐしまつらんと姫と人まうしそと尽は藁二郎を誘引立て奥なる且見姫に云云と笑めるに桜枝主の姫に言よく笑果てそれ歓しく相譚んとやうにありえが丈夫の人に逢られて罪なひとと笑くに第一條は家尊の大人の黄綱を為て往方れざるを害せられて諸せられて為て疑ひの深きにあらずやとまうし解為て料はは妾に有り賜し彼為て像見の扇の歌を正しく澄に立べれあれ為るを求めて丈夫に返し進らせやとまうに幸ひのことあれそれ桜枝を知られとひるを

えうとりの人べ桜枝はやとく小膝を進めて今姫の宣せし傳手とのべ給へ賞妾に一個の叔母有りそは少女ありし比り和田の御館に給吏して四十ホ有る彼処に侍り初は下司の仂婢で有りしその心ざし精悍しく仕まあるの年を歴れば衛に引のぞられて守戸の局と呼れ有り妾が里に在し程叔母も平安里下りしく物やぐれしるも有りその後家の類あるそ妾は些の由縁あるこのうち流れ為て叔為て家に来て有り途と遠くありし音耗絶て有れども今あの叔母は恙なく彼御館に有るとに為て殿いと光神を誣られて妾が叔母の主君なる和田殿領りの人に番卒なども隷られず一個の老女と男童ホを冊しの人と狡世の風まに違ひぬと縦その冊の老女は叔母で有りなども妾霸に消息しそあらんに為て為て像見の扇を殿へ為て有るとそうのは輒ち為べしこの心つ紀しべ姫の云云とまうし試に為て紀と報るを守直うもやくくそは究竟のうれども笑の

中より刃を隠し人のうろハ揃りかさ況あるべき淋さ一死婦人よ秘密を委〇
あバ毛を吹くとて疵を求めこそ了簡よ及ばぬ一旦く思ひ止りゆへといひて姫
たゝり落る涙を拭ひゆよん藁二郎ハ後方より守直が袂をとりて事が
ふく執りゆへバ怨ハあるべきれど。さぞハ又功も終いと浅ゝ存る僕ゆどが助言よ
似て烏滸がましく傷痛ゆハれんと且試よ打出さん扇のゆハ姑く惜て桜枝ゆ
状ぐるり今宵僕よ遣与ゆ然バ明暁くも立く鎌倉へ赴ん桜枝とゆ使と
稱さバ和田の第へ出入ゆこそ究竟の便宜ゆ成らばとも此の
殿の安否をゆんかゝてハいざと真実ゆくうち相譚へバ守直ハ且く按ゝ
莞爾と笑ゝ和主の尋思大切ゆ〇考ゝバまづ凡素をとゝあらゝて後回翰を
ゝく又考て彼ゆ像見を遣れゆバ失ゆんさぬ彼処よ赴くとも人毎ゆうと
用ゆく叔母ハとゆあれ外人よ太田の郷より来ゝ如ど必ゝらゆべゝ喻せゆく

心ゝそハ肝要のゆゆく又ゆの文も肝要ゆれよく微笑と微笑バ桜枝を
羞て立んとゆを守直急よゆゆゆゆの叔母のゆゆを彼と苟紛
ゆよ紛れあゝしあゝれバ商量既よ整ゆ且見姫歓ゆく文の懇ゆ云云と
桜枝よゆゆゆれバ物整んと遠しくあゝ部屋ゆを退りゆゆれバ桜枝ハ
且見姫の詠の隨よゆの文をゆゆゆゆ写ゆ土産ゆ些ゝ果裁ゆ一袱を甲夜の
間よ藁二郎よ遣与ゆれバ藁二郎ハ驚ゆを時ハ六月の上澣翠天涼ゆ生
月夜鎌倉をさゝん起行て只管よ急ぐ程よ僅よ二日半ゆゝ若宮巷路の東ゆ
和田義盛の第よ着ぬ且くゆの洞ゆ屏掛酒肆よ立よりて飲食ゆ酒家ゆ
雑談を側聞ゆよゆ方ゆの噂ゆゆれども心ゆかゆゆゆれバ遂よ件の第ゆ
後門より進ゆ入ゆゆくゆと百五六十歩ゆく中門ゆゆゆゆゆゆ其処よ入れバ前面ハ
閨門ゆゆゆゆ一枚九尺の檜戸を立ゆゆゆの戸よ又樞戸ゆゆゆの前ゆゆゆ板席ゆ

右邊に番屋あり守屋番卒一人狩人二人狩人の板間の框際に
土間あり母屋に孫廂を附くあり大紀の揮戸二枚あり左右へ開く
板席の上に燕脂白粉櫛笄を鬻ぐの物を貸て世渡りとする高麗
物彩色繪團扇などを鬻ぐの異服太織の絹を鬻ぐの商人ホ所
挾箱に聚合ふ局方の仂女の子共幾人か坐入り或ハ二の揮戸の
真白なる半面をあらはして潛やふ物ひもあり飯を著く蠅のごとく商物の重抵
小葛籠のかたに立て坐のごとく物を買や或ハ主の使をうけ
上総木綿の草衣被て右に前葱ゆ太やかなる幼幾重か繞らし締ぶる草
書匣を携左に青張の日傘を引提て遠ゆく邁もあり或ハ麁
拷の前褌を精悍ゆ端打ける女の子ゆ一俵の炭と四五ハの薪をと
軽やかに左右のかたに引提て内に入るもあり又稱して擔ふもあり現この館の

あるゆ和田左衛門尉義盛ハ鎌倉創業の功臣なりその采地ハ信濃にあり又
相模にもあり且侍所の別當なれバ自然に華やかに采るその威福儔多くも
あるゆを小家ハこれをさとく義を大姓ハこれをさとく娟しとなるべし況都會に
田舍児ハ朱門白壁の目に輝く紀瓦牆石甃の足に坦なるをハ紫微玉殿に入り
狩と怪ミ閨閣後堂の欄干に嬪娥霞被の嬋娟に値ハ女國麗農に遊ぶ
狩と疑ふべし藁二郎ハこの光景に呆れ驚くやうにも始入られ且く外面に立
在に商人ホハ退き去り婦女輩もそれ折をよろこれと進ようとおもく平向ハ
裡面より老に執接人立やくこの来つるを向紅一又その裏の刺をとる
つ受とりて要時まちねといひけく呼び裡面ゆ入りまるかくて又藁二郎候
と一時あまりあるく此度ハ色いと黑く肥脂つきたる女の子守ら報簡をと
やうあるゆ彼局に使ゆ炊妾なべ。藁二郎をうんかうんく武藏よりの使ゆ

そをくく欲さとそ俟ひびあひけめこそもあんかへぞ。ゆて去ぬとゆふ蒙二郎は遽しく祇包を受とれば女の子ハ又一枚の守屋のゆ実を取りて云云といひ知もるとあるぬ果て奮入りゆ。一二の門より走り出れバ日影ハ落て暑片よ所。下晡よりゆくれども既ゆ回翰をゆくくれバ只何とゆく楽くくあち急だのせくるやふ直ゆ荏柄ゆ赴ゆく天神を拜ゆ又退ゆく小町ゆ曩ゆ宿ゆ客店ゆ赴ゆく今宵をあゆ暁を程吉見冠者主後ゆ風聞を拷問ゆ。異ゆくくもなくくゆ聊心を安くくゆその暁方ゆ宿をちく北を望て走ゆ。井水ゆ酒ゆ六月のゆも初伏の土用前ゆ炎暑ハ焼くゆ如くゆれども蒙二郎ハ途ゆ憩ゆ直走ゆたくゆこの日ハ武蔵の渋谷ゆ宿り翌ハ早旦て起ゆ。宿のゆゆゆ契くくゆ夜中ゆ腹痛くく邪熱酷くゆれバ苦悩ゆ堪ゆ富下蒙二郎ハ倩ゆ頃の暑くゆれ還ゆも途を急ゆと

ゆくくゆハ持くくゆ十六里を汗汲流して来ゆれバこを霍乱ゆ人ゆ。ゆ憶便ゆと焦燥ども病痾ゆ勝ゆれゆのゆれバ次の日ハ逗留して薬を求て服ゆくくゆ吐泻せくゆ熱邪ハ稍清ゆれども氣力衰へく長途を走るべくゆゆゆゆゆゆ又その次の日ゆ保養ゆ第三日ゆて瘧果くゆれバ猶豫ゆゆゆゆゆゆ

態よおのく無異を祝して藁二郎ハ遠く汗を拭ひ足を洗ひて桜枝が守居
回翰ある袱包を遞与よれば桜枝ハうく歓びく途の疲労のわすれども
姫人の侍り人参りて彼処のすの趣を口親あつ〳〵ものと他ものくいへば
あらをぬく〳〵うして奥へ起居。和田義盛の第の光景富貴繁華の為
体又彼回翰をとりあらら倖の趣ものくさ霍乱〳〵心ものべも渋谷の郷よ
三日逗留せしまで曲み報しバ且見姫ハうもくく且歓び且労ひ桜枝に
畏の封を解しく文を讀して中よ立野紙をうも累ひく走書をうん
老筆なれども美しく初ハ桜枝が恙なきを祝してこゝ異なれを報絶こ久情を
述く訪れを歓ぶよりの扱次の條よそもハ近ろ多賀殿のあん由縁の方
ざまよ俗事をものと狩りて云云と相殫れ侍る秘ものくそのあらものう
姨ハ幸ひよ彼君の冊をそ隷られれバあん臂近く侍うこが外ハ男の童二人で

侍る守禦の兵ものどハ置れぬものべし。ものそ彼君の功高なよ似げるくありくよ
罪かれるまひしをと惜こて憐ものよ此の殿の広ものあそあれ。ものバ
障りあるくもあるくをなのすりとものうけるうんよ人よものくともけものうハ
あるくびとをこれのすをまるしを桜枝刀祢守戸の局と署ものの文をの未なれ
物ものくあるくれく歓び侍りあれるよものもとものめるくものれバどそのものくし。
器ものの料まをそとあるく細小やある折梶両箇を酬とものうものあ枝きく
ものるよそのの一箇まをと美麗ものの乾果子あり一箇ハ糟漬の鮑ものるを淳酢
かくのどくものうれバ且見姫の歓びハものくものもの守直桜枝ハ藁二郎を右左ものあり屏風
立ものく皆是和主の働なとそものもく誉て已ものれバ藁二郎ものも歓びく狂又鎖
倉へ邁んと議ものるよものかりしを翌又遣らんハものもんよ似くものあるものべし特よ
病後のすのれバ一両日を過しそとそと且見姫ものれを制め守直ものも後ものし。

藁三郎ハ頻りよ進ゝそ寸善尺魔と俗ものゝ疲労を厭ふく時後れ障
かゝとハいひぐゝし。ゐん消息もその餘の物も今ゆゝしく整へ更翌も未明ふるゆ起ゆ
渋谷まぐハひと易ゝとハ管勧やく退けゞ桜枝ハ窓を焚つけて物食ゆんを共侶ふ
庖厨のくまよ起ゆ守直これを目送りて一個ハ忠あり一個ハ義あり。ゆゝしくもゐ
くゆ男女かり某ゝぐゆハゝのゆを心りゐくゆゆ。ゆゝしくゆ事ゆを輙く整ひ。賀殿の
勲功と姫ゝ人の貞操を神明佛陀憐ゝそあよ冥助の眼尾を回ゝゆゝしくゆの
かゝゝ。されゆゆ奴婢ホハ此度の祟を怕れて逐電せゝゆゆ。身の眼とそゝも
あゝを一人残り留りたる桜枝ゆ忠心微りゆゆ。その叔母を相潭歟とゝ
あんゆ況藁三郎ゆ老実ある人のゆるよ謨るゆ毎信あゝゆとゆゝ是偖大殿の
仁義の餘徳ゆゝ。稱賛されバ且見姫ハ感涙坐よ禁めゝゆゝ人の城ゆゝ。
身の薄命を歎ひ不樂と潸然と泣ゆひゝゆゝ。床間ゆ料紙とゆゝ

引よゝて夫ゝ猝諾ゆ夏野の鹿の筆も夏毛の長文ハゆゝ別とゆゝ紙ゆ書集ゝく
憂ゆゆゆゆ。契りゝゆゆ仇と恨ゝゆ人をゝゝゝの麻衣のゆゆよゆ祈ゝくゆゆゝ落ゝ
せゝ硯の水も墨ハひる児の脚机走らぬ筆に時移ゝゆゝ稍一通と写果ゝく像見の
扇ゆゆ共よ封ゝ篭ゆ程よ桜枝も亦叔母へ贈ゆ尺素写ゆゝゆゝれバ且見姫ハゝれ
彼とひゝゆよゝゆゝ八重封皮ゝ表筮ハ桜枝ゆゝゝ云云と署べゝとゝく硯を
そゆゝん推向ゆゝバ桜枝ハ筆とゝゝゆゝく写果てゝゆゝ侭よ一封をゝゝ拉ゝとゆゝく忽
地よ跪ゝゆゝ。ゆゝれのゝゆゝハ物足らゝゆゝ。贈ゆハ何とゝゆゝと問れて姫ハ沈吟ゝ考ゝ居の
折ゆゝゆゝ憖よ物を進ゝゆゝハ郎のゆゝゆゝ。ゆゝゆゝ世よ憚の関ゆゝれハゝゆゝ入
おゝをゝゝんのゝゝゝゝれをゝゝゝの叔母前へハゝゆゝゆゝハ便ゆゝ所ゆゝ
壓ゝゝ。鱗の鮮ハゝゆゝ要意よゝんをゝゝゝ豫てゝゆゝゝんゝこの里盡処ゆゝハ流
速くゝ水清ゝゝれバゆゝ何人ゝ唱初ゝん彼処を新玉川とゝゆゝゆゝ流み添ゝゝ

人家の字を或ハ川口とも唱へ高野とも又ハ谷ぐゝ。これらのゆゑぶゝ父君もよく知り給ひしを夏毎の土用ハ彼高野なる里人ホゞ新玉川まで網せ一鰈を進らせ給ひしを今茲ハ家尊の大人もなほ快ハ鎌倉ハ拘れて居給ひ給ふ故に忘れぬ里人ホゞ些の鰈を饋りしゆゑ飯鮓ハとて壓せ一ハ一昨日のなかばなるの鮓かゝば二十日あまりを経くのちハ熟さ常のなれども此度の鮓ハ早漬なれハ五百そよう丸守戸の局へ送り物ハ彼鮓かゝで何らあんといふ桜枝ハ膝揃進めかるものまで出さ乃を用ひ給ひ冥加なあり之なるべし妾が叔母ハとまれかくまれ新玉川網ひる鰈ハ彼らの名物なるを殿わもいふ。豫てもゝ給ひ鰈の鮓最大好き給ふめれば細小なる器ハ藏やく此度進らせ給ふ。その餘れ一呑を守戸へ賜ふめかゝるの物商せ一給ひ障り侍べりと他ものく勧やるゝ絆られて推辞べくもあらぬれば給ハ受て別紙ハ云云と書添へ給ハ桜枝ハ清き磁器をこれ彼と擇ミ出つ洗ひ拭ひく桶なる鮓を移一て送ル侍ら一あるれば且見姫ハ副翰を件の器ハ共ハ前ハ紫の服紗ハ包て送ル程ハ桜枝ハ又餘の器ハ鮓を移一つ推包む主従の饋物を外亟被く祇ハ又包て送ル侍らこの日ハ暮ハ暮ハ桜枝の夜ハ且見姫ハ臺二郎を召近つけて守戸へ饋ハ一果を桜枝して遣与給ふ。ハ一点ハ一ひ給ふ彼処へ遇てのハ云云と宣へバ臺二郎ハ恥ハ一ありて饋物の鮓ハ次ハ晩ハ饋物を背負て守直ハ辞一別れく又鎌倉へと起ル侍ら勇を奮あれバ多ハ光度より疾走り一ハこの日夫ロの渡さ侍らもさ一く前面の人家ハ宿投り次の日も又暁より遠しく旅宿をもとめく只管ハ走る程ハ未牌ハ過んとハ比叡宮巷路ハ来ハ来ハ業内知ハ侍ハ且くも躊躇ハ和田義盛の第ハ稜ハ進入く閨門ハ赴くホ彼樞戸のハ執接人ハ侍ハ葛の袴を著る

の只一個出てきり曩日見る老人かねど商人なども来聚ひばほとり近く走り進て
執接人よりも對ひ卒かぐらく物まうさんと僕ハ使のめし守戸の局へこの一包をあらして
みひとりもおりくハ人倍かぐ届のひねと頼まさえく携らる祇包を恭しくうけハ
執接人心といくへく刺をうけ訝しげなる面色して要時まち
ねどいひ被て包を引提く奥へ入りぬかのそーハ蒙二郎ハ疲労れ足と休めんと框ハ
尻を掛れども守戸が回翰をいまぐもねば心有繋まもつて人の出入る毎に件の
回書とりて蒙二郎ハ尻を外へ迎えしれども負して対へやうり僕と一時ばかり
件の執接人ぞ蒙二郎ハ返しそいつ和主ハいづれの里
き。来てどれの御館と答へるやんあるこの文中ハ多くの中ハ折戸と與せやハあれど守戸の
局といハやー名の違へるやあんとそ彼ハ答ぬ問へどもかる名の婦女子ハ
のハあるーぞどそりてこの一包ハ封の侭ハ返ぞとそりて去ねといひぞせば蒙二郎ハうと

ぞそハ不審ぞとよんん僕ハいかぬ日もさの御館へ使よもそ守戸の局のかん回
翰を賜りるめれば紛れあぐくもいハぞと逼しくいとそあんぞ和主の
御館を推殿とおりぞと詰られてもあ擬浅せぞそハ問とあぞもなー若宮
巷路ハ隠し殿和田の御館ハいハぞとのハ小藤を礙と拍くそハいぞあぞ
初ハ和田の第殿どもうぞ主君ハ賜りてきのハ送ハ移りぞり和田殿へ邁んとすぞハ若崖
巷路の西のつこ今巷路の東とうぞハ紛れあぐくぞとハ蒙二郎驚ぞて原来猛ハ
和田殿ハ別第を賜りそ。あ来住ぞりるひー欲とハあぞーー悔ーさよあハ移らせ
ひーいぞれの殿をハ出殿欲と問せも果ぞ眼を睜りそれ安く何ぞんそ和田殿へ
邁ぞと追立られくぞもく祇包をよくえるハ封度も奮の侭れば引て右ハ
携りぞば暇ぞんん皆是己が怪ぞりぞとうげるくもも勧解る心頭りハ要ーーねば
遽しく辞ー去く一二の門を走り出く一町ぞうり東かる春米店立よりそ件の蒙の

とを問はるゝと捧げし紀の荅ていのやう和田殿の舊第へ猛よ移りゆひしを
北條殿ゆとをりあれよりて和田殿ハ今巷路の東なる梶原屋敷へ移りゆ紀
曩よ梶原景時卿の亡びしよりハ人みな恐れ憚れて結城殿秩父殿その他の老臣六十餘人よ彼積悪を訟られて脱しこと
久一族郎黨相俱して相模なる一ノ宮へ出奔しつ謀叛のゆえあるふよりその明年
駿河なる清見関の邊ゆく景時景季景高景茂景國景宗景則景連
父子九人家隷ハ三十三人誅せられくその地よ梟首せらるれハ正治二年の春ゆて今ハ
四年よりゆやうかれバ景時卿の第ハ彼時既よ官收せらるれく執権の副第ふとて
賜りしを此度復和田殿よ賜りつこハ和田殿の情願ゆあらず若宮巷路の第を
この年来住熟くるふ今ハ多賀藏人を義盛頼りきれバ火急の轉宅ゆいふ
就く酷不便ゆあと頻よ渋りゆふのことこのうちの舊第ハ執権豫て望ゆて。

ゆく呟紀ゆひしを尼御臺のゆん沙汰とて此度猛ふ云云と仰付られしゆあれバ
遂よ和田殿の愁訴ハ如何ゆ四五日以来の催しゆきのみ迭ふ移りゆり已ハ親の
時ゆうして和田殿の御庇を蒙りかくハ世渡るゆのるふ第の遠くゆりゆべいとも便
ゆとをもかし彼御館へ遷んとゆバ今巷路の東なる梶原屋敷とゆゆ。ゆとりハ
西よ當りて間よ岩崎巷路ゆりと知易紀処よりとと叮嚀よ詫けり曩来二郎ハ
云云とゆゆ隨よ悔しくて且くもあよ慰ゆどさりげゆく謝ゆえて遠しくゆも去つ
詫隨よ西を望ゆく走んとて和田殿の舊第へ移りしハ何人ゆんとゆ。
難る疑ひの解ていゆど悔しゆれ在鎌倉の搢紳ハ僕るふ餘れども殊よ捷れく
腹黒紀時政主の第ゆと夢ゆごゆもゆどゆて。ゆどしの程とハゆひゆう鈍や秘密の
一祇を人ゆゆとせしゆて越度ゆれ。ゆれども日おろ念ゆる神佛の擁護ゆゆより
ゆうゆんゆゆバ封度い恙ゆく。ゆふ恨よ返されゆう嗚呼危紀ゆゆ危ゆうこの一包を

暁られく彼処よ留め置れあバ縦弥勒の世を歴ともそう復ほすと難く禍
れより起らんか彼君達の御運も竭ぶ。命数も餘りあれぶ。ぶて難
陷り又揺らぶ。て脱れう欲ぶしよろぶべしとひとりこころよ慰りて歩の運びと
もあれが寺くよ撞く鐘の数七ツハ今欣今巷路ゐ和田義盛の新第へ倏忽走り
著わり案下某生再説多賀蔵人光仲ハ曩よ重忠の直言ゆ僅よ禁錮を寛
られ義盛これを領りて篭居よとゐ日数経れども原是寃枉ゑれバ義盛竊よ
愛顧て守禦と後べ心を用ひて大くゐ。ぶめせ。ぶ美里の苦辛酷しかり。
ゐ幸よ似れども心の憂やるくもゐく廣綱の往方且見姫のゐ或ハ義邦
義秀のゐ彼とゐく此とゐく。とつりく物ゆ人ハ夏の日消し風かよけ下晡ゐり
り浩処よこの日属ゐる。義盛ゐ隷ゐ。守戸の老女ハ尚ゐく。紀新第ゐる
行廊をゐも渡りく光仲の住ゐよゐ前日舊第よ在し程桜枝ゐ竊よ書を

ゐ云云と頼ぶて。そのゐとゐ告て渠ハ姫ゐ。ゐ回報せ。趣を具ぶく又
ゐ。ゐも渠復使をゐく太田の郷ゐ姫ゐ人のゐ消息を寄せゐり折ゐ四下に
守ゐ人ゐれバ届ゐるよゐ。ゐ。ゐ。

いぶられ親より行られ君をも知られし夫婦迭に安否を問ふを誰う正やしと
いふめるはん姥はそのちでめより肩屐を義盛をいれしすわり彼屐の閑隠多
和君もあるせ知ひけるうやこのもの人は知るとも主従一致のうへあれば心ぐう他所へ
洩れ伝はんあん父君より捨られくその伏の君の安うくねを遥に想像らせ奥
さ母の苦ろうを推量りくいと痛ぶ悍を武士といふあれど心つよ知ぬるあるぞよん。
あづ消息をうんをあらして一筆かりともあんぬ〳〵ばかり今内ふ詐欺のあれと
彼方ざまよ姥のこ恨られやせん枉くこの銭を聽ゆとそ岩語棚多料紙硯を
やとこ取ぬりとそやら老女の賊ょ光仲ハ己とをるぞ黙頭ハ守戸ふ
あるば姥も局へ退りて桜枝へ回翰写やん急せゆと真実ふく潜やふぞ
退ぬるかくく光仲ハ且見姫の消息を封推断く披ぬるふ廣綱の像見多。
扇を中ょ包をそく憂ぐくを書つあ〜筆に涙の迹えそう第一條をの

扇を官府のあん疑ひをまうとぬんとを祈りぬると書う次ふハ義三郎ゲ
桜枝ぐす。その恵をの義を稱へう又その次ハ廣綱の世をり捨〜別れのあ
〜〜孝と貞とを一色紙ょ盡ぬ歎ぬをゆばえよ岩井ょ清ぬ水茎の深き
ぬをあるぶふ汲くあるを弥ゆうる件の足素を巻ぬうる服紗色を解
披ぬくをの副翰を取く續むふ高野多里人ホゲ今茲も鯨を饋りぬり
をを飯弊ょ考うくを嗜者ゆ物あれどそ桜枝ゲ頻りょ勧るふあくあん
笑ひょ備へ伝りとこそいと短く書うける光仲ハ高野の里ぬをとく
ざやもなつうく新玉川の清ぬ流れも深ぬハ妹ゲあろゆをとイ巻の蓋を
取てうをその弊の飯の色常よかりくゆあれば胃うも顰めくゆを又ぬ
今の世の人心夫婦の親をも憑くあくし初れ守戸ゲ云云と告〜ぬ原来この
老女よりぬ心をさ〜挟くそ且見ゲ消息をど偽りうれを試るゆゆんと妻

一器の饋
の僧老の
契りを疎く
光仲

れば田断せば。あれどもその言の葉よたゞくも誠顕れしゝ疑ひて受ぎ
投げくれば分れも尺素首見ゞ賞めく前司殿の自筆の歌わ
像見の扇を添えれば。いよく疑ひべくもあれどもこの鮓の色異なり
いと怪し。やうをあらもとえくら折くゝ忽地庭の松枝よ一隻の烏翔来て柵宿
餌欲しげに数鳴くう光仲これを遥に向上てとろあるを領ひて硯筥なるを
遠しく取らんとすれ有繋ぎ寸鉄を許さゞば細やうあり筆の軸ゝ鞦の鮓を
突串ひく三四ッあるこの巻石の邊へ撲地と投与れば烏ハ頭を傾けく要時
えうやうやく飄々と翔降つ四下をえうり足を揃へく跳ゝ近つひく
件の鮓を横ざまゝ咥ゝ衝く樹上ゝ還り頻りに嘴して衝摧ひて忽地啖
盡ひとうえし烏ハ一声亞と鳴く身を轉して樹下へ隕る俄に死でう光仲ハ
この形迹ゝ愕然とうそうも驚ひて原来この鮓中を毒を加く饋をこれ。

眼力の賢ばゝ婦の為に害せられん。嗚呼危ひ危ひ現七らの子ども
生とも婦人ゝあるを優しとゝ鄙言ハこれもありを察るゝ且見姫ハ月
あつの留守の程家夫に心惑めくこれを鬱悒ゝ思ひかくハ不測の罪蒙り
今もこの鎌倉に篭措れども飽ひ遂ゝあるこの毒ども害く淺やもく
せばと計りしゝ疑ひ那。這奴憎むべりくと心の中に凡弾ひく疾視詰る飯
鮓ハ途に入るゝ忽ちと夢ぞもあるゝ哀れる且七光仲ハ
怒を歓めく膝立直し憑れ愚痴ゝ富貴ゝハ他人も聚り貪戦ゝ親
族離るれハ存亡不定の罪人とあり。より妻子も疎く今ゝまゝ
縦且見ゞ奸夫を知るとも身ハ拘れてあるを在り憎しとゝ何ぞ大き且見ゝ
不義の罪重くとも前司殿の恩義ゝ高うれり辛く脱て命に恙ゝ
舊の井平たんのゝ夫婦の縁しも是ぞ今あり離別の状を取りて復ゝ

歓ぜん喜あり形と肚裏よ受ひ入ふ硯の海よ立ち寄り筆の水嬰子心づくしゆうく
くさの泡とあるあぐ又揚流ひ墨より薄ち妹伏の中を裂いらふ見の真蒲
北山遠ち紙屋帝の料紙ハあれど且見姫の副翰の裏引久しく宴時
楽しくさめくと書ぞ贈しれる三行半よ像見の扇巻竜く器の鮮も奮の
どく固く封じくさう氣ゆく樹枝のかくあり暮初る庭面を初とり眸てやりかりー
程よ守戸の局ハ潛やふぬくび来ていふ知ち如しハあくれり欣暮ぬ程やと
急れ待りとあよ光仲頷ち久く局の臧心黙止くくく絶よ回書を遣ぜども
再ヒハ要ち知変ヒこのり人よあくれあバ局ハさくく和田殿の名を立らくとも
あぐしあろ知ち。と警めく件の包を取らそれバ守戸ハあく歓びくあ
あいくとひるおくく次の間のくふ是然と足音ひくをえくまびれ秉燭の
童ひ守戸ハさくぬ面色しく掩ふよ餘る服紗物を袖よ隠しく遠しくあのが

局へ退りくる。鳥雪渦の倚る所雅うその端をあくん原くふこの一條の
錯誤ハ春曇鴟梟その巣を換く落花流水いさざこれを知らぬ豪二郎ハ
秘密の書札を時政の第ふくく邁ち逐よ執接人よ遍与せーふこふハ折戸とひふ待児
あり桜枝が包よ麓る刺よ假名ヒ。とり戸のつぐひの知りくと書ろーとり戸と
をり戸とその文字似れば執接人ハ誤認て躯て折戸よ届けーを折戸も亦疎忽のく
封を断包を披ち久く後よやく多くこぐ方へ贈られーハあぐと曉りて悔しく見ど
御ぐさに彼よ禪ひ此よ告てほく用ド果なるすと牧の方倚ち知ちとれとるるか
こを疑ぐくもあくぬ且見姫主徒より光仲とあの冊ゆる老女守戸へ贈ち知ち又廣櫛の
像見くとひふ扇ち巻竜く二器の鮮を添ろう牧の方ハ熟見くよ見物獲ろと
歓びく竊よ良人時政よ云云と報ていあ彼井平の光仲奴ハ辛く獄舎を出
されとも知ち拘く待ちのふその妻ちりぐと物を贈るハ大贍やぐ今こしとと

妻とともに脱出し、彼奴ホ夫婦のミを伺ひ、年来娼く恋ひ、
要拘人義盛を人ふれとも罪と落さば稍目上の贅脱く心地あれ
これ責せとさーあらばバ時政ハ鼻紙盤の眼鏡を把く件々を見て具く尋
思ーてあるとの證据ありとふとも忽く流罪のめぐみもその妻子の消息ハ
許さく例もあり譬バ今光仲ハその類ひあるべきもこれハこと創業より補佐臣
将軍の分厩ある婦人の密書を偷見く云云と計らず諸老臣ハ挾せんん。
況重忠能負ホハ光仲を具ひ負ものとそ子義時の肚裏も今さふ拷り
かさー涙りちばバ必禁めん又義盛ハ故老の大紳その族黨多れバ聊科を
負ふとも一朝ホハ什ーかさー就くこれ謀ありこれを知ふ法をもて受刃を
以せば。憎ーとふ光仲奴を今宵の中ハ殺ーしその謀ハ箇様くと耳を
引てとこれ示せバ牧の方感服ーく歓ぶと大くふ且見姫の副翰ある。

その一器の鮓の中へと酷烈ある毒を加えくよく搖糝あらく舊のごとく
服紗ハ包こ又折戸ハ擽て断折る封紙ハ似つ〻白紙もその尺素を封ひ
扇を巻篭扨偽筆とよくふるものふその標署を写ふハ彷彿とてぶしを
真いづれと贋とこれくかりかくく内外の重封皮もいくく初ハ異ものとなく九
一時ぞうもあく徐全く修復果ーを折戸ハもう機密ハちらべさらて氣
あく呂ようく汝ハ怒の傷痛さふもも措れば苦心ーくとあるかやう。
これハよ舊のごとかんかれバこれとそもそもある使ホも只云云といふとこれを
返せー。あれとこの封を投却ーあどいあすも曖氣ホも必ハべくハ使ハ
鈍く受とりく知り去ばバ又知らせよと己が仮病を恩ハ被けく真実ー
ばハ分付れバ折戸ハいそぐ歓ぶーん。あるく応く要時も措バ躰て件の
一包を引提て退却く執接人ハ云云といふせく蒙二郎ハ返せーく牧の方を

彼使が異残なく受てのち去りしと折戸が報ふ歟又時政告ふるしがさてもあるべき舌を吐く草笑ひ点頭る時政夫婦の奸計ハ既よりの如くなれど報ふ離山のあるべき長唐櫃四箇ともに光仲を罪に陥せしその本人ハ何ぞ知らしめ看官奈何と拷るべし。されバ又蒙三郎ハ彼時只義盛の轉第せしのみにてその舊第へ移りしのハ時政夫婦を知らず又且見姫の饋物ハ鱗の鮮なるべし。こゝ彼恩を後悔されども包も封も舊のごとくて異なるべくもあらざれバ遂に不覚ふ欺れて再これを携へ今巷路なる義盛の第へと起行うさぐれ共光仲の眼力。凡庸よりあらざれバ。そもそも猜し試くその害を避れども是よりしてその疑ひ只且見姫に係る憐むべし薄命の貞婦徒に寃を抱て憂苦を炉ふ由なくん欲畢竟蒙三郎太田の宿所へかへり来て又甚麼なる説話あるそハ次の巻ふ解分るべきなり。

朝夷巡嶋記全傳第五編巻之三終

世の人歟

東京大学総合図書館蔵